HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帯広大谷短期大学
Citation	高等継続教育研究, 2, 132-148
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51812
Type	other
File Information	Obihirooutani-2.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

5　　帯広大谷短期大学

日　時　　2002年7月31日　13：30～15：30
場　所　　帯広大谷短期大学
話し手　　多田　　稔　　氏（帯広大谷短期大学長）
　　山崎　民子　氏（同生活科学科教授・学生部長）
　　田中　厚一　氏（同日本語日本文学科教授）
　　成田　忠衛　氏（同事務局長）
聞き手　　姉崎・相川・石山・上田敦・川瀬・滝ケ平



多田　　稔　氏

大谷の教育理念

多田　この大学は、80年前、帯広の女学校として発足しました。その中から発展して女子短大になり、そしてさらに現在では共学になっているわけです。

学科は三つです。日本語日本文学科、それから生活科学科。その生活科学科の中が二つの課程に分かれていて、地域社会システム課程と栄養士課程があります。それからもう一つは社会福祉科です。この社会福祉科の中に社会福祉専攻と介護専攻の二つがあります。学生数は1学年が225の定員です。2年生をたしたら450ですね。そういうコンパクトな大学なんです。

短大としても40年という歴史があり、四大構想もあったみたいですし、今もあるわけなんですけれども、畜大とこの短大しかこの広い帯広、十勝には高等教育機関がないわけなんです。だからいろいろな憶測があるわけなんです。

そういう中で、改組するといっても、文科省に申請して来年からというのはなかなか、調査もできなかったので、それで日本語日本文学科の中に外国人に対する日本語教師養成というのを設けることにしました。これは言ってみれば外国人に日本語を伝えるということですから、将来はロシア語かなんかもあるかもしれませんが、今のところ中国語と英語をバックグランドにして、そして日本語教育の教師を養成するというコースが一つです。

それからもう一つは、生活科学科の中にあった栄養士課程以外の地域社会システム課程といって、言ってみれば地域社会の人材養成というようなことですね。それを掘り下げて、十勝の人材養成ということで、あとの課程は非常に専門的な要素が強いのに対して、リベラルな、といいますか、読み書き計算、計算といえば今ではコンピュータになるわけで、こういったところを入れて基本的な足腰の強い人材をつくる。そしてそれを身につけて、地域に出ていただくし、就職していただくし、いわゆる専門職としてではなしに、何でもやるというゼネラリストというかたちで挑戦していただく。それから四大にでもそこから行ける。今は各大学編入試験でも相当な数を受け入れておりますので。そういうことで間口を広げたということです。これが現状です。

専門的な件に関しては、大体90%台という就職率を誇っています。つまり栄養士課程であるとか保育士とか介護福祉士だとかこういうふうな資格は非常にかっちりしていますから、その資格さえ取ればほとんどと言っていいくらい就職には事欠かないので、90何%が就職できます。そんなところで、日文の方も、例えば教職コースだとか学芸員基礎資格コースだとか、実務情報コースだとか、そういったところを細分化しているんです。全体

的に見ればそういうところです。

キャンパスはご承知のとおり広いところにあるわけで、帯広に来られて、まあ随分広いなあと思われたのではないかと思います。本州から比べれば札幌も広いなあという感じがするんですけれども、私も京大を出て京都に住んでおりましたものですから、札幌に出たら相当広いなこりゃと。ところがここに来たらもう一つ広いなあということでね（笑）、ついこの間隣りの高校まで行くのに、ちょっと隣りの高校へ行ってくるよって、僕は自転車で行こうかと思っていたんですけど、自転車なんかで行けるところではありません、といわれて、ああそうか、と本当に愕然としたということがありました。畜産大からこちらに来られるときも相当な距離があったでしょう。

姉崎　そうですね。ええ。

多田　JR 帯広駅からここまで 10 ㎞です。畜大は南の端にありますし、南から北に来られたというところで、ここはもう帯広市ではなく十勝川の北からは音更町です。河東郡という郡なんです。だから帯広の町の周りにこういうふうな町がいくつもあって、全体的に十勝というかたちになってます。

姉崎　「大谷」という名前が付属高校の教育理念としてもついているし短大もそうだと思うんですけれども、他方では、教養教育は学長先生がおっしゃったように、リベラルな教養人の養成というものがあるんですが、社会的な変動の中ではある種の資格対応、ニーズへの対応という問題があって、その辺のバランスの問題で、それぞれの大学は工夫、苦心されているとうかがっているんですが、今おっしゃったような地域社会システムであるとか、日本語教師養成というものをつくられる、そういう学科改組、介護も少しその前そうだったと思いますけれども、これはどういうような討議を経て、ある程度のこの地域の高等教育ニーズというようなものとの関係でつくられたのでしょうか。

十勝地域とのつながり

多田　JICA という組織がありますよね。海外協力隊とかそういうようなことをやっています。それからまた帯広市が中国の朝陽と姉妹都市なんです。それで交換をやっています。もちろんここは音更町ですから、帯広とはちょっと違うんですけれども、文化圏からいうと十勝で、本当に近いところにあるわけです。ですから同じようなかたちでうちにも朝陽から留学生が 1 回生、2 回生で合計で 8 人おります。そんなことで、まだ英語圏からは来ていないんですけれども、中国からはもうすでに来ているわけです。

それから、短大というのは地域との関係というのを非常に重視している機関ですから、これは去年からですけれども、去年の 4 月から音更町とタイアップしまして、生涯教育としていろんなことをやっているわけです。田中さんが中心になって、今年は成人講座みたいなものを 16 講座ですから、ほとんど全員がやっているんです。何らか科目を自分の専門を中心としてやっているのです。

音更町は大変教育熱心なところでして、隣りには、うちのキャンパスみたいですけれども実はそうじゃなくて、町の図書館と生涯学習センターをもっています。そういったところも活用して地域と一緒にやっていく。それから、「ふれあい住宅」といって、介護の学生たちを中心に、前は 2 年生だけだったのが、今は 1 年生もいて、いわゆるお年の方、老人ホームに行かれるくらいの人ですね、そういう人が 1 階に住んで、2 階には介護を専門とする学生たちが住む。それで上と下でいろいろなかたちの交流をします。上手な交流というんでしょうかね、あまりべたっと同じ階になるといろいろ問題になってくる、それから年齢的にいっても一世代とんでいるというふれあいなんです。だからおばあちゃんたちにすれば娘じゃなしに孫という感じで、そういうふれあいです。これを何カ所かにもっているわけです。町と組んでそんなこともやっています。これも非常にユニークだとしてよく紹介されるんですけれども。

それから町民といろんなことをやっていまして、一緒になって食事をしたり、ときどきこっちに来ていただいてこれをサポートする会だとか、いわゆる地域との連携には事欠かない、ということです。それから、JICA の人たちもこの前来たんですけれども、パプア・ニューギニアの中高の先生たちが地区の人たちにもお会いしたらしく、うちにも来まして、それでうちで学生と交流したいということでした。この間はサハリンからある機関を通じて来たんですけれども、これはもっと沢山来るはずだったんですけれども、1 人だけサハリンの大学から来まして、ここで何時間かいろんな話をして帰りました。そういうような交流をやっています。

また、この地域の高校の国際交流が非常に熱心なんです。特に音更高校であるとか鹿追高校というのはそれぞれにやっています。音更高校はカリフォルニア、鹿追の方はカナダにある高校と交換学生を含めて交流しているんですね。地域として、全体がそういう国際的な感覚に目覚めた地域です。大都会でも外国を知らないといったところもありますが、それぞれ遠く離れてはいるんですけれども、そういうところと交流しているのに感銘しますね。

それともう一つは中学・高校との連携です。この間は中学の修学旅行の発表会をうちでさせてくれと。そしてうちの学生、それからうちの先生方に聞いてもらうという会をこの間やりました。日本語日本文学関係とです。それから高大連携ということでは、音更高校と短大との間でやっています。栄養士課程では、食材がもともとはどういうふうなかたちで芽が生えてくるか、そしてできあがるのかということを知らないで、食材だけでもって化学薬品をこうやって調合してというのは困るので、実際にそれは根を下ろしたこんなかたちの食材なんだということでないといかんということで、これは山崎先生にやっていただいているんですけれども、農業科の栽培をしているところと交流しています。

教養教育と資格取得

田中　仏教理念に基づく教養教育と資格取得のための教育と両立・調和はどういうふうにして、というお話ですよね。ここで特にみなさん学生さんで、いろんな大学を調査されてお分かりかと思うんですけれども、特に短期大学の場合は、どうしても資格という問題が根っこにあるわけなんです。それと同時に資格というところでいうと短大と競合してくるのが専門学校になってくるわけです。国立もこうした雰囲気がだんだん出ているんですけれども、私学の場合は、どういう色を出していくか、特に短大の場合は、まさに生き残りというか、よく言われている言い方でいえば、生き残りをかけてどういう色を出していくかというところがポイントになるわけです。

そういう中で教養教育と資格取得というものをつなぐものが私学の理念ということに多分なるだろうと思うんです。ここでの資格ということで一番メジャーなものでいうと、保育士、介護福祉士ですとか、あるいは栄養士ということになるんでしょうけども、そういうものをベースに、うちでは大谷ですから、大谷的なというか、私は仏教をあまり分かりませんけれども、そういう仏教的な色を出すということはあり方としては全然間違ってはいないし、それがむしろ独自性を生んでくるだろうと思うんです。

例えば、本学でいえば、「人材」という言葉はよろしくないというんです。つまり物として扱って、「人材教育」なんていう言い方はおかしいだろうと、人間教育に変えろと。言葉は言葉なんだけれども、そういうスタンスに立っていけば、それぞれの学科、日文とかの文学系、生活科学、自然科学、社会福祉、社会学系、そういうそれぞれの違った部分でも根っこにあるしっかりした理念をすえていくことによって、大学の色を出していくことができるし、またそれはすごく重要なことなんだと。

さらにつけ加えていえば、いかんせん 2 年間しかないわけですよね。4 年間ある大学もしくは大学院をもっているところと比べたらほんのわずかな期間で、2 年間というのは、六三三四の中では圧倒的に少ない。入ったら次の年卒業してしまわなければならないという機関なわけです。そういう中においては、専門教育とはいうけれども、実際問題としては本当の意味での専門教育というところまでなかなかいかない。そういう中で何を教えるかということになれば、どういうふうにしてこれから社会に出ていって関わっていけるかという関わり方の力、さっき多田先生が足腰の力とおっしゃっていましたけれども、そういうものをどうやって身につけさせていくかということになるわけで、まあその辺が大谷の理念だと。

ですから、教養教育と資格取得というのはその部分で連動するんじゃないかと、むしろかなり強力に結びつけることがある種の色を出していくことになるんじゃないかというふうに考えております。

山崎　「真実・協調・敬愛」というのが本学の教訓で、違う意味から見れば、理事長はお坊さんなんですけれども、そのあたりは仏・法・僧と同じ題目なんですけれども、要するに「命」。人と関わってゆく上で日文も社福も人との関わりを教えていることであるからという点で関係があるだろうと思っておりまして、当然そこは別に親鸞様とかい

うことではないわけですけれども、教養の中でそういう生き方を教えています。それから、社会福祉科の主任に聞きましたら、10 年くらい前に「仏教福祉」という科目を開講していたんです。なぜやめたんですかと聞きましたら、厚生省で指定科目が非常に多くなったので、共通教養科目の中の「宗教」で教えるからいいだろうということでなくしましたということでした。

多田　ここはもともとは真宗大谷派が母体ですから。全国に大谷系の学校がございますね、私も最後は京都の大谷にいたんです。それでそこからこちらに来たわけです。その他全国、九州から北海道まで、北海道はわりにたくさんあるんですよ。高校もたくさんありますし。そういう仏教の精神に根ざして、日文科にしろ生活科学科にしろ、社会福祉科にしろ、もともとそういう理念でつくられたわけです。それを現代でも一般教育の中でそれをやっている。そういう調和というか理念といいますか、そういうものを含めまして今まで発展してきたんじゃないかと思います。

姉妹校との関係

姉崎　大谷の姉妹校は道内に短大三つありますよね、ちょっとお聞きすると財政的にはつながりはないと、それからそれぞれがそれぞれの大学の個性でやっていると、名前が大谷で、共通精神が今おっしゃったようなことだというふうに思うんですけれど、素人目から見ているとそれぞれ非常に強いつながりがあるのかなというふうな感じがするんですけれども､それはそれぞれ棲み分けというか、地域のそれぞれの需要に合わせてやってらっしゃるのかなという感じもするんですけれども、定期的な理事会というようなお話がありましたけれども。

多田　理事会は直接つながってないんですけれど、理事長とはつながってます。だから大谷というのは、例えば北海道の仏教学会だとか、あるいは札幌を中心とした一つのネットワークみたいなものですね。そういうのだったらあります。だけど、それは年に一回集会するとかそういったものです。そして財政的には、帯広は帯広ですし、全く別です。

山崎　本学は、大谷系高校 6 校には指定校を出していますけれども､あまり受験者は多くありません。

多田　ここは高校と幼稚園がそばにあるんですけれどもね、その三つは一緒になっています。一つの学園組織として。経営的にはこれだけということですね。

滝ヶ平　今、大谷高校の推薦枠というお話で、入ってくる学生のどれくらいが大谷高校か分かりますか。

成田　約 30 名です。

山崎　ええ、帯広地区からは 30 名。過去においては大体 1 割から 2 割くらいでしたね。

多田　うちの定員は 225 ですからね。

山崎　昔は 40 人くらいはいましたからね。昔は 2 割くらいでしたけど、今は…。

多田　だから大体 2 割くらい､40 人くらいいたんですけどね、今はちょっと少なくなっています。指定校枠もたしか 20 何人というかたちで。

山崎　帯広大谷高校はそのようで、他のところはお声をかけてもそんなにはいないです。

多田　というのは、ここが社会福祉だとか栄養士だとか、そういうコースが主なわけです。日文もありますが。だから大谷高校へ行っている生徒は、普通科ですから、ここで受け入れきれない学生もいるわけですよね。こういうところを希望する、例えば福祉を希望するなら喜んでくるでしょう。だけど、例えばコンピュータをやるとか、あるいは言語をやるとなると全然ダメですね。

姉崎　学生のリクルートにとって 1 割強くらい確保というのは大事な財政源ですね。昨日の釧路短大は付属校をやめて緑ヶ岡高校というふうに変えたので、それでせいぜいそこは数名くらいしか入ってこないということでした。

山崎　帯広も付属高校ではありません。去年から連携しましょうということで、委員会を立ち上げて今年の後期からなんとか具体的に入試制度を含めて、課外授業だとかそういうところで連携していこうというふうに、遅まきながら決まったということなんです。

多田　何十年か歴史が経つと時にはお互いにバラバラになりますね。昔できたときは同じ学園だろうとおっしゃるけど、しかし、今は場所も異なり高校は高校、短大は短大で別個の学校です。

田中　昔から高校と大学が手を携えてやってきたというのは、あんまりないと思うんですよね。

学生の地元志向と職業意識

姉崎　学生の範囲は、入ってこられるのは大体十勝

管内が中心ですか。

田中　かつて学生が平成 6～7 年のものすごく多かった時代に、うちの大谷でも本州からある程度の数の学生が来ていたんですよね、ほとんど東北ですけど、まあ東京に来るのより安いっていう事情もおそらくあったと思うんですけれども、生活とか、それがだんだん、だんだん少子化でへこんでいく中で、現在は十勝が 80%前後だと思いますね。その他道内で 15～20%だと思います。

姉崎　道内が 90 何%ですか。

田中　ほとんどだと思います。十勝の中でも帯広がその全体の半分くらいかそれ以上か、完全にそれは地元に根づいたというか密着したかたちの短大ということだと思うんですよ。

姉崎　入試を今は札幌でもやられているというふうに聞いているんですが、前は本州でも入試を…。

山崎　東北で実施していました。

姉崎　東北でやられたんですか。

山崎　出口の部分では、社会福祉科は一部北海道の施設に就職しますけれども、他の学科は地元志向が強いです。地元の学校から入ってきたら地元に就職しようとすることが多いです。それは先程申し上げた地域社会システムあたりはなんとか入ってきた地元の学生を地元に供給できるように支援しなければなりません。

姉崎　北海道の経済全体を見ていると、人口が減ったり落ち込んでいる中で、十勝管内は比較的圏域内商品が循環型の経済になっていて、人口も、音更もそうですけれど少し増えてきているというというような点では、ある程度人数を確保できる要素はあるかなと思うんですけれども。ただ、日文ですと、前は国文学科ですね、国文と日本語日本文学というのは多少性格変化があるというふうのと、日本語教師養成の場合だと北海道内は比較的本州と比べれば、外国人比率が少ないですね。そういう点でいうと、短大を出た学生は将来的な出口のところでは…。

田中　おっしゃるとおりですよね。大変な話なんですが、日本語教師養成はある種の冒険だと個人的には思っているんです。

どういうことかと申しますと、十勝は、これはデータ取ったわけでもなんでもないんですけれども、地元志向が非常に強いところだと思うんです。十勝が一番素晴らしいところなんだっていうふうに、年配の方が思うならまだしも若い子が思う。普通は自分の住んでいるところをこうバカヤローって言って出て行くというパターンが多いと思うんですよね。ところが、十勝の、特に高校生、中学生は、かなり地元志向が強い。ですから地元に就職できれば、という想いがあって、ただし地元に対するある種の嫌悪感というのも同時に持っていて、地元の短大、大学なんていやだと言って札幌へ出てしまって、札幌の学生は札幌がいやと言って本州へ出ていって…（笑）。それがパターンなんです。

そういう中で、日本語教師養成コースっていうのは、そんなこと言わないで外へ出て行きなさいよというコースなんです。要するに、札幌じゃなくてアメリカでもどこでも行くというコースで、これがある程度うまくいくとすれば、ちょっと大げさな言い方をすれば、十勝の若い人たちの価値観を変えるくらいのものになるんじゃないかなというふうに思います。それからさっきのお話でいうと、JICA との連携ということがありまして、帯広、十勝っていうところは非常に国際交流が盛んな地域で、国際交流っていう言葉は昔から別にたくさんあった言葉なんでしょうけど、特に昨今重要視されてきている。そういう中でそこと連携していきたいという思いがあるわけなんです。つまり十勝だとかそういうところの国際交流と関わっていくことができればというふうに。

ですから学科の中での一つのコース、課程ということももちろんそうなんですけれども、それ以外に社会人、つまりある程度年配になった人の再教育、新しい第二の人生を科目等履修生として新しい人生を見い出してしてもらえるようなしくみをつくってみたいというふうに思うわけです。

日本語日本文学科というのは国文科から変わったんですけれども、平成 7、8 年だったと思うんですが、国文というのは自己完結型というか、ある種の国際性、世界の中の日本文学ですとか世界の中の日本という視点を広く、ある程度具体的な、全体的な、そういう視点を持ち続けることが必要だろうというふうに思ったんです。ですから、今、国文ってがんばって言っているのは、國學院とかしかないでしょう。そのものは価値観だからいいんですけれど、そういうふうに総体的な視点をとっていく必要性があるのではないかと考えていたので、流れとしては、一貫していたのかなというふうに思います。

姉崎　今日もアートフェスティバルというようなものをやっているんですかね。あれはもう終わったんですか。

山崎　まだやっていますね。

相川　就職の問題とかさっきちょっと出たんですけれども、二点あって、まず入学するときに学生はある程度その目的、資格とかそういう卒業後の進路とか決まって入ってくるのかこないのかということと、またはそれがはっきりしていないということだったら、職業意識の形成をどう行なっているのかということを教えていただきたいんですけれども。

多田　その点は、考えられないくらい高校生がバチッと決めてくる。そして例えばうちの社会福祉科の社会福祉の方に行きたいと。その中でも介護をやりたいというふうに、もうそれでとにかくまっすぐ、その点では私の経験したことのない高校生たちです。普通の四大ですと、2年生で何をやろうとしているのか、とにかく授業は出ていますけれども、まだもう一つ何か分からない。そしてまた学科もさまざまなものがありますしね。国際文化だとかいろいろな名前の学科がいっぱいあるじゃないですか。それでそういうところに入っていった学生は目的意識が強くないですね。ここの短大の学生はものすごく目的意識があって、私は介護士になってこうして、こうして…。人生設計をみんな考えている。

相川　そうですか。

多田　その点はもう考えられないくらいに目的意識があって、それは北海道の独特なことかもしれない。つまり、専門学校に行く学生が本州の倍くらいじゃないですか、パーセンテージでは。受験雑誌を見たらそんなことが書いてありましたね。だから要するに、それがどういうところから来ているかは分かりません。家庭が貧困で早く就職したいのかですね、どういう理由なのかそれは分かりませんけれども、しかし、要するに専門志向が強いです。ものすごく専門志向が強い。

相川　そうですか。なんか他の大学の調査とかでは比較的結構目的意識がまだ明確ではないという学生が多いところが結構多かったので、ここではどうかなと思ったんですけど。

山崎　学長がおっしゃったように本当に明確です。例えば、栄養士なんかは栄養士になるために栄養士課程にきて勉強したいと言うのですが、しかし入学時の考えはわりと曖昧なんですね。で、その2年間の中で本当に栄養士なりたいもの、それからそれに関した職業、一般職に就くもの、というふうに2年間の学生との関わりの中できちっと学生に目的意識を持たせて進路に分けてやるというのをします。

姉崎　先ほどうかがった畜産大でも、獣医は明確ですけど、畜産の方はやっぱりなかなか大変で、人気のコースが九つのうち三つくらいに集中する。それで4割くらいはまとまっちゃって、残りをどう4年間でもう一回変えていくかっていう、そのための努力を相当されている。僕らから見ると比較的明確に選んできているように思うけれども、その中で自分探しの学生たちを差し置いて、そこをもう少し教育の部分で変えるということをされていて、なるほどと思ったんですけれども、短大では比較的そういう点では明瞭だと思うんですが。

田中　明瞭なんですけれど、ようするに介護福祉士になりたいとは思うんですよ。特に男女差別や区別が残っている中で女性がある程度しっかりしたかたちで就職できる、唯一とはいいませんがかなり特別な職種だと思うんです。そういう中で介護士になりたいというのは分かるんですけれども、じゃあ具体的にどういう仕事をするかということをどれだけ勉強してきているかというとかなり曖昧なんです。

　ですから結局イメージだと思うんです。入ってきてから、介護士なんかでいえば、現場に行ってみるととてつもないギャップ、とんでもない事態に遭遇するわけですよね。そういうときの心の葛藤ですとか、こんなはずじゃなかったとか、あるわけです。あるいは、それで純粋な学生は悩んじゃって、こういうふうに考えるのは私は差別的な体質なのではないかとかですね、そんなことを考えながら葛藤するということがあるんで、それをこう全部含めたかたちで教育を展開していくというのはなかなかこれは厄介なことだというふうに思います。挫折者はそんなにいないと思いますけれども、内的な挫折は結構味わっているんじゃ、という気はします。

　あと私のところの学科でいえば、何になりたいというふうに思ってみても、なれないわけです。だから教職のコースがあっても、中学校の教員免許を取れるけれども短大レベルで学校の先生になれるかというとなかなかなれない。いや、なるた



山崎　民子　氏

めにはかなり相当ハードな努力をしなくてはならないわけで、なれないんです。ですから、なりたという思いと現実問題との区分けがかなりはっきりしている。その中での葛藤ってあるんじゃないかなというふうに思います。そのあたりをいろいろ調べていったら興味深い結果が出てくるんじゃないかなと思ったりもしますね。

多田　早くからそういうふうにピシッと方針が立つ、これはある意味では素晴らしいことかもしれないけど、ある意味では非常に葛藤が多いんじゃないか、入って実はこんなことだったのかというふうに思うのと、途中でそう思わなくても、18 才の子が自分でもっともっと違ったところに行きたい、目移りしていろいろやってみたい、というふうに考えるのが自然なことだと思います。自分自身を考えてみても、私は 18 のときどうだったかなと思うと、特別な才能があるとかなんとかそんな…、音楽の天才みたいな人だったら早くから決まるのでしょうけど、大方の人はなかなかそれが決まらないし、いろんな偶然みたいなものに接して出てくるんじゃないかと思うんです。その辺を最初から決めてしまうことからくる葛藤はありうることだと思います。

　四大の場合だったら教養部で 2 年間、勝手なことができましたよね。単位だって 4 年で取ればいいんですから、まったく自由だった。それから見れば全然反対の方向ですよ。

山崎　厚労省で決められた資格ですからかなりの単位取得が必要です。

姉崎　短大だと 62 単位ですね。それで資格を取ると結構な数になって。

山崎　80～90 にはなりますから。

姉崎　昨日釧路短大へ行ったら 128 単位取っている学生がいると言っていて、どんな生活しているのかと思いまして（笑）。

山崎　幼稚園の資格と両方取りますからね。

田中　去年で 125、6 取っていましたね。今年で 131 と言ったかな。

多田　四大と同じぐらいっていうような。本当にね、信じられないくらい単位をたくさん取る。そんなんじゃ、遊ぶ暇もないんじゃないかという生活を 2 年間やっていますね。

姉崎　釧路でも、親の期待の中では、フルタイムで正規の職という、そういうイメージでいるんだけど、なかなかそういうのはなくて、就職の率のカウントの仕方で嘱託や臨職も就職率の中に入れているんだけれども、学生の中にも、逆にいうとフルタイムにこだわらずにやりたいところをやろうと思うと、嘱託とか臨職でもあえて行く学生もいるんだというようなことをうかがってきたんですが、そのあたりの学生の就職意識は変わってきていますか。

山崎　それはもう、保育士あたりはそういう形態になってますから。栄養士なんかでも、最初は調理員だとかそういうかたちで、時給だとかそういうのがほとんどですから、そういうことを乗り越えていかないと上にいけない。

多田　募集の人数が少ない上にそういう厳しい条件で卒業していきます。それで臨時採用とかそういうかたちでないと取らないですからね。やっぱり、厳しいなと思いますね。

姉崎　博物館、学芸員もある意味では非常に厳しい。正規でやろうとするとほとんど大学院卒ですね。そうすると短大でいく場合だと多分正規というよりは、少し違うかたちになるんじゃないかと思うんですけれども。

田中　3 年間の実務経験が必要になると思うんですが、実際問題として一般職と同じようなかたちで、空きがない限りはないんですよね。ですから、本音でいうと、臨職でもいいから職場に入って、そこから担当になりなさいよというようなかたちしか、実際上はないということで、学生は分かっていてそこを選んでいくというところがあるわけなんで、そのあたりの具体的なこととなりたいことの振り分けをどういうふうにしているのかというあたりがいつも思うことなんです。どうしても一般職、しかも臨職が多くなってくるのは当たり前で、学生もその上で進路選択を行なっていると思

いますね。

姉崎　釧路ほどここはひどくはないですね、地域経済でいうと。

田中　前は釧路は一番ひどかったんですけどね。今は良くなってきているようです。

姉崎　地域で希望して、ある程度探せばないわけではないですよね。

田中　そうですね。

共学化・社会人学生

山崎　男女共学にしましたのは平成 11 年です。大谷高校が平成 5 年に男女共学にしたということで、かなりこれは抵抗があったのかもしれませんけれども、社会のニーズということです。これはやはり栄養士だとか保育士だとか介護福祉なんかの資格希望者がいるからというようなことですね、それに応えるということで。最初は男女共学にしたら介護福祉で、男子がそんな介護をするのはどうか、というようなことが会議でも話題になったんですけれども、そういうことにはならないのではないかということで開設しましたら、介護の方にも随分男子学生も入りまして、平成 11 年には男子が 39 名、12 年は 36 名、13 年には 37 名、14 年には 38 名入学しました。社会人は除いた数字です。

　社会人入学に関しましても、15 年くらい前、こ音更町に移転する前からある制度です。平成 10 年には 3 名、11 年には 5 名、12 年には 9 名、13 年には 10 名、14 年には 9 名おります。

姉崎　30 数名という男子学生は数字的には低くないですね。かなりいますね。

山崎　そうですね。社会福祉科が多いです。

田中　凹まないのが不思議なんですが。

山崎　そうなんです。

田中　ずっと一定数を維持しているというのが不思議なんです。

山崎　介護なんかは社会人の男子が多いです。仕事をやめて入学したという人がおります。就職は大丈夫なのかと心配しましたが、就職しているんです。ですから、今のところはそれらの要望に応えているのではないかと思います。

姉崎　学生の間に社会人の方が入ってきたりすると、教育上よいプラス効果がありますか。

田中　もちろんです。やっぱり自腹を切って勉強している人間を横で見ていたら、学生もまじめにやらないということはないです。いい意味でものすごく刺激的になっている。年間の授業料がいくらでしたっけ。

成田　100 万円ちょっと。

田中　100 万ちょっと位です。それを自分で働いてボンと出して。こうした年配の人が横で一生懸命勉強していて、横で騒いでいるっていうわけにはいかないだろうということがあるわけです。そういう刺激になっている。それから、今まではわりと 60 代くらいの女性の方が残りの人生を楽しくやりたいみたいな、もう 1 回勉強してみたくなったという人が多かったんですけれども、今度は男の人で、ある目的意識を持って思いっきり転換する、そういう人たちも出てきました。そういう意味での刺激はあると思います。

　今まで女子短大だったものですから、私もそこに何年もいたわけで、それが普通だと思っていたんですが、それは今考えれば非常にいびつな図式だった。男子学生が入ることによってごく当たり前の風景、日常が出てきたということですね。ですからもっといろんな心配をしていたんですけれども、それほどのことじゃなかったなということなんです。つまらないことからいろいろ心配はしたんですけれど、むしろよかったんじゃないかということですね。

山崎　社会福祉専攻、介護福祉専攻は男子が多いんですけど、生活科学科は女性が多いんです。男性あまり来ません。資格もないですし。

姉崎　社会人の方には減免措置とかそういうのはないんですか。

成田　今までですと無条件にあったんです。2 年前から規定を改めて、経済的な困窮度による入学金の減免をメインにしています。留学生の方は、入学金のほか授業料の減免をやっています。

　いろんな大学調べたら社会人はお金を持っているはずなんだから、実際はそうじゃないんですけれど、減免しなくてもいいんじゃないの、という大学さんも多かったんですよ。でも、相談会やってみますと､それほどお金を持ってないけれども、もう 1 回勉強しなおしたいという方が非常に多く、そのところを前向きに検討したいなと思っております。少しでも安くしてあげたいと。

進路の開拓と指導

姉崎　短大の場合だと今いろんな模索があって、科

目等履修生などのシステムで、学位授与機構と結んで学士を取得したり専攻科を設けたり、四年制志向が一方で出てきたり、分野によってですけれど、ここはトランスファーを推奨されているとうかがっているんですが、そのあたりのことを。

田中　指定校がありますよね。うちであれば大谷大学ですとか、それからいくつか道内の私大です。どんなところでも私大はそういうかたちで、われわれが高校に指定校を出すのと同じようなかたちを取らざるを得なくなってきてきるわけで、四年制大学の編入を希望すれば、誰でもとはいいませんけれども、かなりの確率で入ることができるわけです。実際には、昨年は5名の編入学生です。

ちょっと話を戻しますと、四大編入希望者に対する支援の仕方ということでいえば、年度当初に特に指定校推薦に関して、教務が窓口になって、具体的な説明会をするわけです。掲示して、いついつありますよとやっても来ない、というのが現実です。多分、学校に対する自分の思いがあるんだと思うんですよね。特に2年生くらいになったら、四年制行きたいっていう学生がたくさんいるんです。これは当たり前ですけれど、学校へ行っている方が楽しいに決まっているし、勉強もしたくなるっていうのがあるので、個人的には上に行って勉強した方がいいよって思うんですけれども、実際問題､やっぱり経済的な面がすごく重要です。帯広、十勝に、畜産大の他に四年制の人文社会学系の大学があれば生活費はかからないわけですから、行きやすいというのがあるんですが、十勝を越えて札幌だ、どこだというふうに出ていって、京都だということになると、これはちょっとやそっとじゃないですね。ですから、内的な希望はあるんでしょうが、具体化するというところまではなかなかいかないのが実際なのかなと思います。

山崎　生活科学科は1名しか今までいなかったんですけれども、それは本人がインターネットで調べました。社会福祉科ですと、近間にもわりとあります。本学では教務課が窓口ですけれども、具体的にはやはり学科の先生に相談していますね。

多田　今年は教務が発表したのは6人です。ここを土台にしてジャンプしていただくのはおおいに結構ですが、四大の側から見ると、短大から来た学生たちの単位数は、専門的なところは別として、一般的な要素が強い科目は単位が足りないんですよね。ですからそれをどう振り替えてもらえるかというところをいろいろ模索しています。

山崎　語学関係の科目で悩んでいるみたいです。

姉崎　そうしたら、地域社会との関係の方をおうかがいしたいと思います。地域社会というふうに考えておられる場合に帯広大谷短大の場合だと、どの範囲を地域社会、社会連携エリアだと考えておられるのかというのと、それから、具体的にどういうふうな活動をされているのかということです。ふれあい住宅のことなど、私たちも非常に関心があるところですけれども、それだけではなくて、生涯教育との関係もあるでしょうし、もう少しおうかがいできたらと思います。

いくつか分節化していると思うんですが、最初の方は実習や就職先の開拓というふうな問題があったり、それから今度新しくできたジェネラリストの養成というふうなことがあって、地域社会システム課程の中の実践的なという中身の問題とか、それから音更とのふれあいというのもあるでしょうし、一方では、広くとらえれば、帯広も含めてであろうというふうに思われますし、先程おっしゃったように人文社会系という点でいうと管内唯一ということがありますので、そのあたりのことを教えていただくというふうに。

多田　地域における実習や就職先の開拓について、昨年から北海道中小企業同友会帯広支部の会員になっているんです。地域社会システム課程の1年生の学生たちに、これは同友会事務局を通して同友会のメンバーの企業で1週間、インターンシップをしてもらっています。北海道中小企業同友会帯広支部では月一回の例会を設けているので、就職課担当者が参加して企業の人事担当者と情報交換しています。この点は帯広との関係はものすごくやっている。

同時に、ここは音更町ですから、かつては帯広にあったのがこっちに来たわけですし、この広大な土地を全部音更町から無料で借りているのですから､音更町とのつながりは生涯教育であるとか、あるいは音更の地域のサークルとか、いろんなところと完全に密着しています。それからここの高校とか中学校、そういうところとの関係もしっかりしています。ことに去年あたりから非常にやっております。

その他に全十勝管内で、一般企業及び栄養士、専門職の開拓は就職担当者が中心になって、企業訪問を行い情報収集しています。採用になった施

設にはお礼とあいさつにうかがっている。社会福祉施設、保育所、特別擁護老人ホーム、知的障害者施設等は、教員が施設実習巡回をし、求人依頼の情報収集にあたっている。非常に肌目細かく、実習とセットにして行っています。

一般就職を希望する学生は地元での就職を強く希望し、大半が十勝管内に就職しています。企業内評価で高い評価を得た場合は指定校として求人を依頼されています。また、うちは栄養士、保育士、介護福祉士などの資格を取得した学生を数多く輩出している。結婚出産後も継続して勤務することが多く、卒業後、管理栄養士、介護支援専門士、専門ケアマネージャー、社会福祉士などのもう一つ上の資格を取得して活躍している卒業生も多数います。

そういうことですから、地域での評価はさまざまに推測されるけれども、一般的には高いんじゃないかと思います。

姉崎　そういう学生支援の、就職支援の場合は就職室というようなものが担当になるのですか、教員と事務局のタイアップが必要だと思いますけれども。

山崎　就職委員会というものがありますから、就職課長は教員で、他に事務局で、二年生の担任が毎年サポートする組織です。

多田　教員の方も職員の方も非常に数が少ないんですよね。だから余裕もないし、両方一体化してやっているとうふうです。入試でもそうですね。

姉崎　国立大学も今までは何もしてなかったんですけど、近年やっぱり、ちょっと…（笑）

多田　畜産大に行かれていろいろな動きをうかがわれたと思うんですけれども、私立と国立というのは全然違います。私立の場合は本当に肌目細かいんですよ。その辺いわゆる国立の、まあ畜産大なんかは非常に地域に密接したところですけど、それでもやっぱり教職員の意識が違うと思いますね。私は両方知っているから分かるんですけどね、比較してみたら、違うなあと思います。

姉崎　入口の開拓では、いろいろ説明会をやったり、高校へミニ講義とか、そういうのをいくつかやっていますけれど、出口の方はなかなかです。こちらでは地域システムがつくられたということで、地域社会システムは卒業年次は次年度になるんでしょうか。

多田　再来年です。

山崎　システム自体はもうすでにあるんですけれども、カリキュラムを変えただけです。

川瀬　地域社会において実践的に活躍できる人材を育成すること、あとその育成した後の就職先の確保とか、どういうふうに育成した能力を生かすようなことを考えているのかということを詳しく聞きたいと思うんですけれども。

多田　介護士だとか、社会福祉士だとか、栄養士だとか、これは専門職ですね。そういう要素の非常に強い学科、コースですよね。それで、いろんな企業に出て行くのに、企業にも現場現場で幅があるわけですし、それに初めからスペシャリスト的な教育をやるということは、ちょっと不可能ではないのかと。むしろそういうふうにするよりか、足腰を強くするという、さっきも言ったような読み書き計算、その他こういうふうな基礎をやった方が、人間的な魅力というものを発揮できるのではないか。リベラルとかジェネラリストと言ったのはそういう意味なんです。ただ何でもできるという、わけの分からん表面的なことをやるという、そういう意味じゃなしにですね、近ごろある種の見直しが行われ教養が大事だと言っている、そういったような教養と言っても、ただ単に何とかの講座を開いたら教養が増えた、そんなもんじゃなしに、実践的な教養ですね。そして本当に自分で考える力、書く力、しゃべる力、こういうものを養う方が大事なんじゃないかということです。そういうことで、先生方と相談してカリキュラムを改訂したわけです。

どういう学生が入ってくるかにもよりますけれど、人数か少ないものですから、1人1人を見て、それぞれにふさわしい企業に就職してくれればいいなと、またそれができるんじゃないかと、教職員の方がやっておられる、非常にきめ細かくやっておられますからね、そういうかたちで企業に就職させるということが一番いいんじゃなかろうか。

銀行に行けばその銀行のやり方があるでしょうし、それから食品メーカーに行けばそういうスペシャリストを求めるでしょうしね、まあそれよりも会社に入って企業内研修とかいろんなものがありますから、初めからスペシャリストみたいな教育をして、こうしていきなさいなんていうのではなく、20歳で出ていくんですから、それこそ四大を出たってあてはまることでしょうが、そのときには基礎力というのがないといけないというわけ



田中　厚一　氏

で、スペシャリストと反対の方向へ打ち出したんです。とにかく帯広の中に日文やこのシステム課程を志向するものを広げて、一番広げたところが日本語教師養成課程、つまりこれは英語教育、中国語教育、それらの裏番組です。四大構想なんかもっとしたら、そういうことも考えないといけない。

姉崎　教育理念としては､そういうジェネラリスト、あるいはリベラルなパースペクティブの広い学生を養成する、大学の中のカリキュラムもあるけれど、いったんいろんな世界と向き合って、そのことによってつけられる力、コミュニケーション能力やあるいは知らない人にも対応できる力とか。

多田　そうですね。そういう類のことをやらせて、それから実際にインターンシップやってみたりですね､企業へ行っていろいろやる｡実践の領域で、あるいは海外に出すとかそういうことも考えています。もちろんスペシャリストも大事ですよ。地域の要望がありますから。それに応えてきたんですから。その辺のバランスをとりながらやっていく必要があります。

インターンシップ

姉崎　インターンシップによる具体的な変化、学生がすごく変わったとか、そのへんのエピソードはありますか。

田中　私のところはちょっと変わっていまして、ですからちょっと参考になるか分からないんですが、地方のコミュニティーFMがございますよね。そこで帯広、十勝には2カ所、十勝毎日新聞社がやっているFM－JAGAというところと、北海道新聞の帯広支社や帯広ガスがベースになっているFMウイングという二つがあるんです。札幌でいったらFMもいわとかありますよね｡三角山とか。ああいうイメージだと思うんですが、そこのうちのFM－JAGAと提携してインターンシップをやっています。そこは2週間で、学生2人か3人ずつグループにして行かせているんですが、具体的にはコマーシャルをつくったりとか、実際に取材に行ったりとか、機材を使ったり、触らせてもらったりとか、最終的には実際に自分たちで取材したことをまとめて電波に乗せてライブで話してもらう、というようなことをやっています。

ですから通常のインターンシップとは少し違っていて、日文科の教育理念に特化したかたちでやっているんです。どういうことかというと、自己表現の明確化。大体文学部でいうと文章を書かせたりすることが多いですよね、そういうことじゃなくて､いわゆるオーラル･コミュニケーション。要するに、ものを話して、特に顔が見えない、身体表現のできない空間で声を出して人に理解してもらうことの大切さみたいなものを実感させようという､その理念に特化してやっているわけです。

通常のインターンシップとはちょっと違うかもしれませんが、ただそれにしても、さっきの姉崎先生が言われたことで言えば、入ってきたばかりの18、19の学生が、特に年上というんですか、世代を超えた人とのつきあい方、ノウハウすら知らないという中で、絶句してたたずんでいるというケースがあるんです。そういう学生たちが、社会、特に企業の中へ入ったときにいい意味で変わって帰ってくるわけです。はじめて厳しさとか楽しさとかっていうものを感じて帰ってきて、まあ簡単に言えば自分に自信を持って帰ってくる。ですから、職業観だとか何だとかっていうこと以前にですね、さっき先生が言われた自分さがしの一つにインターンシップがなるのかなと。じゃあ大学とか短大は何なのかなという話もあるんですけれども。そういう部分で非常にインターンシップは大きな役割を果たしているっていうことなんです。

さっきの地域社会システムのことでいうと、今までは地域社会システム課程というのは、どちらかというと「学問」だったんです。カリキュラムの展開でいうと。「概論」とか「各論」みたいな、黒板に向かって教員が話して、社会のしくみとか世の中とかってやるわけですけど、でも実際問題それをやってもその地域それ自体をみたり、音更

なり帯広なり十勝をみたときに、それをこうしっかり連動するかというと、全くしないということになるわけです。

それじゃほとんど意味がないだろうということで、地域社会システムという具体的な、つまりボランティアにしてもここには書いていませんけれども、NPO とのかかわりですとか、地域の産業祭りに参加したりとか、インターンシップとか、あるいはフィールドワークという言い方をしていますけれど、そういう中で、具体的に自分たちの世代とは違う世代の中に入っていっていろんなことを体験することの意味、ここで実践的に活躍できるベースをつくるというふうに多分なっていくんだろうな、と思うんです。

姉崎　昨日は釧路教育大で地域連携委員会というのをつくられて、祭りなんかをということで。そういうのもあると。

多田　教育実習に出ると大体変わりますよね、それまで教わる一方だったわけでしょ、居心地がよかったわけだけど、今度教える立場になったら眠ってはおられませんからね。私は英語なんですけど、発音一つでもアウトになるんだぞとまずいうと、みんなパニックになりますよね（笑）。〔ａ:〕と〔ə :〕の発音が出来ないようじゃ話にならんじゃないか、それでよく中学校や高校へ教育実習やるなと言ったら、もうパニックになりますよ。それが訓練できていない学生がいるわけですよ。教育実習へ行くといい意味で変わってきますからね。ちゃんとしてくるし、まあ今は日数が少なくなって、昔なんかはひと月くらい行ったことがありましたね。

田中　教育実習だと相手が教員ですから、教える中味というのが大体決まっているわけですよね、先生によってノウハウっていうのがありますけれど、基本的には大体教えてくれる中味が決まっている。ところが、インターンシップの場合ですと、まったく違っていまして、本当に何もさせてくれないところから、かなり懇切丁寧なところまであります。だいたいはあまり教えてくれないんですよね（笑）。そういう中で何かを学んでくる。姿勢を身につけることが結構大事なんじゃないかというふうに期待するんです。

今までの学生は、小学校から高校、大学まで、教えてくれることを勉強していたんですね。それは本当の勉強じゃないよってことは分かるんですけれども、それを初めてインターンシップなりなんなり行ってみたときに、何も教えてもらえないで私たちはこれから 2 週間どうするわけ？という状況の中で、何かしていかなければならないという雰囲気が結構重要なんだというふうに思います。

介護等体験が教職の中に入りましたよね、ところが介護等体験は施設、あるいは養護学校みたいなところに行くんですけれど、そうすると、相手は施設ですから社会福祉の意欲を持った学生しか今まで扱ってないんですよね、実習では。ですから、教職の連中が待ちの姿勢で待っていると腹が立ってしょうがないというところがある。ところが教職の学生たちは、僕たちはいわれたことを全部やってきてすごく充実した良い実習でした、というんですね (笑)。このギャップはすごいものがあるので、やっぱり実習のやり方とかその方向性とか差とかはかなり大きなものがあるのかな、という印象ですね。

多田　それにしても社会福祉士、それから介護福祉士の、年間 8 週間くらいですか、実習はものすごいですね。必須なんですよ。どうしてもそれを取らないと介護士の資格がもらえない。だからうちの共通教養の科目をとって、プラス専門のそれをいっぱい集めると、さっきおっしゃったみたいになります。

ふれあい住宅

姉崎　ふれあい住宅の話とそれから次の公開講座、生涯学習プログラムのそのあたりの話をちょっと。

山崎　同じ屋根の下で生活してますから、学生が雪かきをしないとかそんな細かなことはありますけど、大きなトラブルはなくやっています。最初ちょっと困ったのは、全国版で放映とかされますと、突然に取材に来られたりして、そういう問題はありました。今はそんなことは聞いてはいないですね。

町の方は介護福祉の学生を入れたいんですけど、埋まらないときには、社会福祉専攻の学生も入れます。私どもは全般的に学生のことを考えたとき、人との関わりという視点では社福だけでなく、日文科でも生活科の学生でもいいのかなというふうに思っています。

成田　この事業は全国的にも注目は集めておりまして、1990 年に事業を開始して、もう 10 数年経ってます。当時は、5 億円ちょっとかけて建築をし

ております。2棟建っていて、2棟と言っても鍵型ですから、見た目は四つあるように見えるんですけれども、上下あって、下にはお年寄りの方、上が学生の住宅です。上が16名、下に15名が現在入居しております。学生は2年間入居できます。毎年春先は入学生の歓迎パーティー、3月の卒業式の時期になると卒業パーティなどをやっております。

滝ヶ平　それは共同生活ということですか。

成田　そうです。月1回は必ず上下入居者のイベント、集まりがあります。顔合わせで一緒に食事したりですね。

山崎　高齢者といっても元気ですね。

多田　しかし、食事なんかだったら趣好が全然違います。例えば、お粥が好きなんていうのは、若い人はほとんど嫌うでしょうしね。だからその点は別にしているんですよ。その辺は一緒には住んでいるんだけれども、共有するところと共有しないところとをうまくやらないと、うまいこといきませんからね。お年寄りと何もかも調子が合うわけじゃないし、若い者もいつも遠慮しながらやっているんじゃ面白くないわけで、だからその辺は10何年間いろいろなことを試行錯誤して、上手にやっています。

　こんなに広い土地ですから、下宿としても非常に有効ですよね。歩いて5分くらいの、安く住めて、そしてそういうところで、共同生活ではあるけれど完全に食べ物から何からみんな一緒というわけじゃないんだから。ある意味ではみんなそれぞれ勝手にやっているわけですからね。

成田　共有会は月1回です。ですから、ほぼ皆さん独立の生活はすることができます。ただ女性のみなので、男性は入れないので、制約はあるんですけれどね。

姉崎　高齢者の方も女性だけ。

成田　はい。女性だけです。

滝ヶ平　普通に日中は講義だとか実習とかで大学へ来ているわけですよね。その間どうしているのだろうだとか、あとクラブ活動やっている人だとか、帰りが遅いとか。

田中　介護しなければならないという状況ではないわけですよね。

山崎　全くないです。

田中　元気な年配の方々たくさんいらっしゃいますから。

山崎　要介護の方はいないですから。

成田　まったく1人でお住まいのご老人と思って下さればいいんですよ。

田中　学生に妙な責任感だとか負担を与えてしまうんじゃ絶対長続きしないわけですよね。だから、お互いの生活とプライバシーをきちんと守った上で、月一回、ゆるやかに交流していく。それで、それぞれの世代を越えた交流をする。

多田　月1回は交流があるし、それで年1回は、歓迎会などで私もよばれます。それから朝起きて、お互いにおはようございますのあいさつ。そういうのもやっているみたいですね。

姉崎　入口は一緒なんですか。

多田　玄関は同じですね。

姉崎　2階に上がるときに1階の下駄箱の脇を通る。

多田　2階に下宿しているというふうな。

山崎　だから2世帯住宅です。

成田　ですから、なるべく触れ合おうということがあるわけです。

姉崎　家賃は少し安いんですか。

成田　学生は2万円です。

山崎　安いですね。

姉崎　高齢者の方はそうすると、本人がお構いなければ学生が何回も入れ替わるわけですね。

成田　そうです。高齢者の方はもう10年くらいずっとの方もいらっしゃいます。

姉崎　そうすると5人くらいの学生が入れ替わってくる。

成田　そうです。そのくらいの順番で変わっていきます。ですから、卒業のときにはご老人の方も学生も涙を流して…。

多田　そのくらいにつきあっていても、毎日毎日顔を合わせますから、だんだんお互いに情が移りますしね、だから非常に仲良くしていますね。本当に孫とおばあちゃん、そういうふうな感じで、非常に良いんじゃないかと思います。これが介護せねばならぬ、というふうになったらこうはいきませんからね、学生では。学校へ来なくちゃならないし、留守中どうしたらいいんだなんて、そんなこと言い出したらできない。だいたい健康な方々が多いんですよね。だからそういう意味では、世代一つ飛んだ面白いコミュニケーションというようなそういう感じがしますね。

姉崎　ケアマインドというか、そういうものが自然とできてくる。

多田　就職のことなんかについてもおばあちゃんが一生懸命心配してね、あんた決まってないの、なんていうことでいろいろやってみたり、そしてまた、卒業して、帰ってきたらそこへ行って、ということがいくつもあります。

公開講座

姉崎　こういうとりくみはあんまりないですよね。生涯学習のプログラムで、これは音更の教育委員会社会教育課とかそういうところとの連携事業ですか。

田中　完全な連携です。共催というかたちで、まったく五分五分というかたちで展開している。おそらく行政と連携して私学でこういうかたちでやっている例はあまりないんじゃないかなと思っています。

簡単に説明させていただきますと、昨年度から音更町と生涯学習の講座を共催で展開しないかというかたちで事業をはじめて、平成 13 年、今年 14 年で 2 年目なんですがやっております。姉崎先生が言われた地域社会とはどこまでを言うのかということで、さっきも申し上げたんですけれども、大谷短大というのは十勝で唯一の短期大学で、基本的には十勝なんだろうというふうに思うんです。ただこれまた実際問題として、18 人しかいない教員の中で、全員が出回ってそこら中ぐるぐる回るってというわけにはなかなかいかないので、さしあたりは音更をベースにして徐々に地域を広げていくというスタンスをとっているんです。

それまでも短大としての地域貢献はやってきたんですよね。それぞれの学科でのいわゆる公開講座みたいなものがありますよね、教育学部なんかでもきっとあると思うんですけれども。これまた悲しいことに、公開講座というのは人がほとんど入らないというのが実際問題としてありました。私どもの日文なんかでも公開講座をやっても、どれだけ広報宣伝しても、20 人くらい、30 まで来るかなっていうような数字でしかない。

そういう中で、音更町と連携することのメリットというのは、まず認知度の問題があると思うんですよね。具体的には広報誌です。広報誌に載せてもらうということで、平成 13 年度を見ていただいたら分かるんですけれども、講座を 8 講座つくって受講者数が 196 名という、約 200 名くらいの実績になったわけです。数字がどうして問題になるかというと、これもご存知の通りですけれども、行政というのはやはり数字で見ていくというのがありますから、何とか確保してでもってやっていくことになるんです。それでとりあえず 196 名というのも、前期目一杯だったんですけれども、こんなに好評だったら後期もやってくれよということで、後期も開講して、また学生込みですけれども、198 名くらいの数字を残したということなんです。

そして、平成 14 年度は合わせて約 400 名というのは、これはちょっととてつもない数字で、どうしてそういうことになったかというと、今年度に関しましては、教育委員会から道民カレッジの連携講座にしてくれないかという話がありました。8000 人だか集めなければならないということがあるらしくてですね、その中での 400 という数字は高いだろうということなんですね。音更としては道に対して連携できるのはいいことだろうということで、今年は道民カレッジの連携講座というかたちで展開していこうということです。

受講者数はトータルで今日現在で 414 名。今年は 8 講座から倍増の 16 講座にしました。ただこれはテクニックがあって、講座の数を半分にしましたので、16 講座でも実は去年と同じ位の講座数になっているんです。どうしてそういうふうにしたかというと、メニューをたくさん広げていくことによって受講者数を獲得したいという思いがありまして、そうやりましたら倍増したということなんです。14 年度もものすごい数字なんだろうなと個人的には思うんですけれども。

出席率は、たいした当てになる数字ではないんですが、昨年から今年に関してのデータを見ていただいたら分かるんです。昨年は大体 60%から 70%、今の時点で、今年は約 80%弱くらいの数字になっています。これもある意味では定着してきた証拠になるのかなと思います。私どもの講座の場合は 1 回 200 円ですので、お金がもったいないからがんばって来ているということではないと思います。そういう意味でいえば、リピーターの確保という意味でいうと、それなりの定着率、認知度が高まったのかなと思っています。

地域別のところでも、やはり音更の方の数が多いです。3 分の 2、帯広の方が残り 3 分の 1 くらいになっていると思います。それから今年新しく加えたのは、教育委員会と連携するかたちで、小

学生に向けての講座をつくりました。ご存知の通り土曜日曜の問題が出ておりまして、前に音更町の小中学校の先生と話したときに、基本的には土曜日は私たちは身動きがとれないんだと、あるいは、見たくないとはいいませんが、地域に帰すということで、小学校や中学校は関わらない、関われないんだし関わらない、というんですね。ちょっと微妙ですけれど。その中で、基本的に戻された子どもたちを地域で見る。そのときに教育委員会でいろんなことをやるわけです。

それで十勝の教育委員会でもいろんなことをやったり、動物園でもやったりしていますけれど、その中でわれわれも混ぜてもらって、やったということになります。ただし、これは音更町の教育委員会と連携することになりましたので、音更町に限定してやりました。十勝管内の他のところとはやらないでですね。やれないと言った方がいいのかな。それで、受講者の数と出席率の数なんかも出ているんですが、トータルで 82 名ぐらいの受講生､子どもが集まったということになります。当初の募集が 15、15、15 の 45 ですので、残りを切り捨てるわけにもいかなかったので、さらにクラスを増やしたという経緯です。

ただ、困ったのは、そういうことをやっていると挨拶に小学校の方に行ってもほとんど認知されていないというのです。へえ、そんなのがあったんですかというところがあって、ちょっとびっくりしたところなんですけれども、80 数名、音更町内の 5、6 年生の数の相当なパーセントを占めているはずなんですけれども、10%とか、もうちょっといくのかな、クラスに何人かは必ず行っているという状況になっているはずなんです。それでも小学校の校長さん、教頭さんはほとんど分かっていない。実はそういうところももっと切り崩していかなくてはダメなんだなあと、そんなことを今、考えています。

それから、これは個人的ですけれども、行政との連携というのはこれからどういうかたちで進めていくべきなのかということです。数字的にはもうこれで十分でしょうというところもあるし、それから内容としてももう目一杯のところまで来ているわけですね。その後、どういうかたちでさらに音更町なら音更町、十勝なら十勝、帯広なら帯広というところと何をめざして連携していくんだろうかというあたりがちょっと見えてこないというのが、今の私の感じているところです。そんなふうに思いました。

姉崎　生涯学習は独自の予算を御持ちなんですか。

田中　はい、持ちました。今年からです。そんなに大きくありません。全体で 100 万くらいです。

姉崎　教員は兼務ですか。

田中　はい、もちろんです。

姉崎　専任の先生を置くというような計画はありますか。

田中　置きたいですよね、本当は（笑)。

姉崎　共催の場合は、音更とお金を持ち寄ってということになるんですか。それとも向こうがお金を出すのでしょうか。

田中　今の行政も厳しいということですから、事務的な部分についての、全額じゃありませんが多少はみてくれるというような感じです。そんなところでいいでしょうか。

成田　基本的には、印刷物とか、町民、受講生向けの PR の費用は行政がみれるんですよ。だからそれはみてあげましょうということで応援していただいています。ですけれども、講義をしていただいた先生の謝金というのはこれはうちの予算でやっております。そちらの方がずっと大きいですよね。ロングランでやりますので。北海道もこの事業をみてくれるように要求をしました。それでも行政の場合は実は 2 分の 1 ほどなんですね。ですので、大きくかけているところは半分といっても大きく戻るんですけれども、私どもはそんなに大きくやっていませんので 100 万ぐらいですけど、道は人件費はダメだというので、そんなには返ってきません。

姉崎　そういう系統的な大学の知的資源を還元するということと同時に、地域との連携ではアクティブな方とか先にいくような話がありましたけれども、ボランティアリーダー的な人を養成していくとか、そういうねらいとかをおもちですか。

田中　行政の方はそういうふうに考えているんです。ですから、大学の知的資源を使うことによって地域のボランティアのリーダーを養成していって、そういう人たちがまた町民とか市民を教える、指導していく仕組みをつくれたらいいなあ、と思っているようです。

ただ実際は､はじめて分かったんですけれども、こんなことを言ったら音更町に怒られてしまいますけれども、行政の中の生涯学習課の役割はまだ

まだ小さいんですよね。生涯学習っていうのはなんとなく、おじいちゃんおばあちゃんに何かを教えていればいいだろうというような雰囲気があって、生涯学習っていうのはお年寄りのためのものっていうのがイメージで、そこを拭い切れていない感じがあるわけです。

ところが実際には、年齢構成を見ていただいたら分かるんですが、30～50 代くらいが圧倒的に多いんですよね。特に女性が多いですけど男性の方も多くなってきている。ということで、新しい生涯学習の役割や意義、意味が、町が思っているところと違うところに動き出しているんじゃないかなというのがここ 1～2 年の印象なんです。ですから、今先生おっしゃられたかたちでどんどん新しいかたちが見えてくるんじゃないかと思います。

四大化構想

姉崎　地域の高等教育機関という点でいうと、畜産大学もあるんですけれど、あそこはほとんど 8 割が外から来る、十勝から学生が来てほしいけれどもなかなか難しいという中で、あそこにも人文社会系の先生がいらっしゃったりするんですけれど、高等教育機関と連携というような点で、人文系の四大がないという困難点もあるでしょうけど、将来構想とも関わりますけれども、今の段階でお話しいただける範囲のことを教えていただければと思います。

多田　過去に四大構想というのがあって、それがいっぺん潰れているわけなんですよね。しかし、地域の要望というのが依然としてあるわけです。ここの持っている三つの学科、それから畜大の持っている学科、それらを全部参照しながら、何をつけ加えたらいいのかという議論は出てきますね。

帯広市長とか、この音更の町長とかそういうところが今いろいろと考えてはいるんだろうと思うんですけれど、例えば釧路なんかが大きな市になりましたけども、ここもどういうふうにこれからなるか。今のところはバラバラですからね、だけどそれじゃ発展しないでしょうし、いずれの時点かでまとまるときがあるのかもしれませんし、そのときは四大の構想を実現する最大のポイントになるんじゃないかと思われます。

うちの大学としても、このままでいいかということでは、将来構想委員会という委員会ももうすでに 2 年前あたりにあったわけですから、それに引き続いて今もどんどんやってもらっています。ただ拡大するだけでいいのか、あるいは新設するのか、どんなものをやったらいいのか、そして四大としてどういうところを立ち上げたらいいのか、地域の要望とか、あるいは資金だとか、そしてその調査だとか、それから商工会議所、そういう経済関連の環境やそういうものもあるでしょうし。



成田　忠衛　氏

国立で室蘭とか工科系の大学が二つ、小樽と旭川などがありますけれども、それから北海道大がありますけれども、いろんなことでまとまるのは難しいんじゃないかと思うんですけどね。それをほったらかしにして、帯広、十勝でなんかやるとか、あるいはそういうような大きなものになんか巻き込まれないでいろんなことを考えているんじゃないかと思うんだけれども、そういうことではっきりしたことが意気込みも見えない。私の個人的な希望としては、道東には四大の人文系があればいい。特に十勝の関係では何もありませんしね、ここの短大だけなんです。だからここももう少し発展していってもいいんじゃないかという気持ちを持ってます。けれど、なにせ私は新米ですから、ここへ来て以来いろいろと勉強させてもらっています。

石山　地域との関わりで、生涯学習プログラム、小学生講座なんか設けられていますけれども、週 5 日制の問題になると、今度はやっぱり小学生だけではなくて中学生であるとか高校生へも、系列校だけではなくて、十勝という広域を対象にした、小中高、少年、青少年含めた講座というのも拡大していければいいのかな、と思うんですが。

田中　言われたことを何とかしたいと思っているんですが、札幌であればたくさん大学があって、な

かなかこうネットワークをつくるのって難しいですけれども、小学校があって中学校があって高校があって、それで短大があって大学があって、行政がどこかで関わっている。そういうお互いに自分が中心だというしくみをつくっていく。高等教育機関のネットワークみたいなものを、多分キーワードは「緩やかな連携」だと思うんですけれども、お互いの利を守りながらの連携をしていくという道すじをどうやってつくっていくのかということで、その一環としてまず小学生をやろうって考えたんです。どうして中学校じゃないのかというと、中学校はやりづらかったんです（笑）。なかなか難しい。それなら小学校かなと。高校に関しては、音更高校なんかと連携をはじめています。あるいは大谷高校なんかともまた、付属のいろいろな問題が出てきていますので、何とかなるかなと考えています。

個人的な希望としては、畜産大と何らかのかたちで、単位互換というかたちを含めて連携できればいいと思いますけれど、ちょっと難しいかもしれない。そこに行政が入ってうまく展開していけるような道すじがあると、十勝の高等教育機関のネットワークは面白いかたちになるんじゃないかなと思います。

多田　私はこれまで英語をやっていましたので、英語教育なんてのは小学校教育で今盛んに言い出したんですよね。幼稚園からやるんだとか、いろいろ聞きますけれども、今小学校で英語をはじめるようになりましたし、大阪なんかでは 10 年も前からそういうふうなことで指定校をつくって一貫教育を立ち上げているわけです。だから十勝においてもやろうと思えばできなくはないですね。将来ここに一つ、色々な機能をもったセンターみたいな大きなものをつくり、十勝のいろんなものが一貫してできるふうな、そういうものを。今は幻ですけれども、可能性は非常に大きいところだと思うんです。

それに至るまでに、例えば畜産大との単位互換であるとか、いわゆる京都コンソーシアム、ああいうふうなこともできなくはないわけです。二つだけの大学、短大ですから。そういうものも段階的にやり、そして最終的に一貫した、全部をやるようなものをつくる。そして、さらにそれを、夢ですけども、例えば北方圏領域での外国との交流ですね、そういうものを。

今回も帯広の市長さんと話したときも、市長さんが帯広市はアメリカのウィスコンシンあたりの大学と、例えばウィスコンシンあたりの農業関係とそういうところとタイアップしたいんだ、ということを言っていましたね。つまり産業が同じだから、そういうことですよね、地盤が同じだから。だからそういうアメリカあるいはデンマークだとかスウェーデンとか、あるいはスコットランドだとかアイルランドとか、そういうふうな北方圏関係の文化、さらに英語圏ばかりじゃないです、中国語もありますし、そういうふうな視野の中で、大学としてまとまれば非常に面白いものが出てくるというのが一つの夢なんです。そういうふうな気持ちもないわけではないんですよ。

姉崎　どうも長時間おうかがいしまして、ありがとうございました。